ふくしま共同診療所と共にあゆむ会を結成しました

6月23日、福島市の県青少年会館において「ふくしま共同診療所と共にあゆむ会　結成のつどい」が行われました。

きっかけは、診療所の「避難・保養・医療」の取り組みで出会ったみなさんと交流を重ねるなかで、「診療所の患者さん同士がつながれればいいよね」「企画準備の検討段階から自分たちで考え、運営していく会をつくれたらいいね」という話でした。その後、幾度も話し合いをつみ重ね、ようやく結成することができました。会長は後藤尚生さん（4ページ参照）が引き受けてくださいました。

つどいでは、福島診療所建設委員会の渡辺事務局長から結成までの経過が報告され、布施院長からも「やれることからやっていくということはとても大事なこと。県内の医師も動き始めている。診療所を起点に横のつながりができるということはすごいこと。すごく楽しみ」と期待をこめて挨拶を行いました。

当日は10時から15時まで、同会場の別室で「無料甲状腺エコー検査」を行い、検査を受診してそのままつどいに合流し、入会される方もいらっしゃいました。

「胸に抱えている思いを気がねなくしゃべれる。私のために作ったような会ね」「原発事故の話をしたら止まらなくなる。東電・行政には山ほど言いたいことがある」「原発事故は人間関係をばらばらにした。これから助け合って前進していければ」など、子や孫、また自分の将来について、一堂に会して語り合うことで会のイメージも膨らみました。

（ふくしま共同診療所事務長　須田儀一郎）

被曝と帰還の強制反対署名1万筆を提出

7月4日、7回目の署名提出を行いました。今回提出した1万筆をあわせて、これまで提出した署名は5万7千筆になりました。

廃炉作業は再臨界の危険さえあるなかで、その周辺に住民の帰還を進めたり、線路上だけを除染した放射能の森の中を電車を走らせる常磐線全線開通は、とても危険なことではないかと申し入れしました。県は廃炉担当部局、常磐線全線開通に関する担当部局を「知らない」として明らかにしませんでした。命と健康に関わる重大な施策がこうしたレベルで取り扱われていることは許せません。いっそうの声を上げていきましょう。（申し入れ書はふくしま共同診療所ホームページでご覧いただけます）

被曝と帰還の強制反対署名
67,829 筆（8月24日現在）

署名運動へのご協力をお願いします

被曝帰還反対　検索

ふくしま共同診療所のとりくみ

院長　布施幸彦

いつも福島診療所建設委員会に基金を寄せてくださり、ありがとうございます。この間、日常的な診療についても多数のご質問をいただいており、今回はその紹介をさせていただきます。

●「被ばくはゼロ以外に安全はない」をモットーに

2012年12月に開院した当初はほとんどが甲状腺エコー検査でした。私たちは「福島県民は放射能で被ばくしているため甲状腺がんの疑いがあるので、甲状腺検査はあくまでも治療の一環」という立場をつらぬいてきました。

県立医大の「放射能の影響はない」という見解が、福島の医療界を支配していますので、「患者の声をきいてくれる医者がいない」という県民の切実な声がありました。これにこたえて、元国立がんセンター放射線診断部長で超音波検査の第一人者であった松江寛人先生（初代院長）を中心に「被ばくと向き合う診療を行う医療機関が必要だ」ということで協力を呼びかけ、開設したのが共同診療所です。松江先生は「被ばくに『しきい値』はなく、ゼロ以外に安全はない」との節を曲げませんでした。

しかし、それゆえに甲状腺エコー専門の診療所だという誤解も生み、6年たったいまでも「普通の診療もやっているの？」と驚かれることがあります。被ばくによる健康被害は甲状腺がんだけではなく、免疫力の低下とそれに伴う様々な疾患や避難生活の長期化のもとでの疾患の増加が心配され、当初から内科にも力を入れてきました。

子どもたちの診療のためには土日に開くことも求められました。保護者も仕事をかかえ、平日では診療を受けることができないということと、放射能の心配をすることが「風評被害を助長する」という雰囲気のなかで、学校を休んで甲状腺エコー検査を受けることが困難という事情があったからです。それでも春、夏、冬の学校が休みのときは、多くの子どもたちと家族がエコー検査の受診に訪れました。これまでに延べ3千人の甲状腺エコー検査をやっています。甲状腺検査は減ってはきているのですが、それでも定期的に受診している方は多くおられます。

● 除染労働者の健康を守る

2015年頃から増えてきたのは、除染労働者の健康診断です。除染関連は、事業者が何重にもおよぶ下請け構造となり、なかにはブラック企業も散見され、他の医療機関で差別的な扱いもあったように聞きました。仕事が休みの土日に受診できることが除染労働者のあいだでの口コミで広がり、多くの方の健康診断を行いました。

現在は除染事業自体がほぼなくなっているのですが、それに代わって浜通りでの家屋解体作業が目立つようになってきました。避難指示解除によって家屋に固定資産税がかかるようになったため、家屋解体の要望が増えているからです。この作業はアスベストの危険もあり、こうした労働者の健康を守ることも診療所の責務だと考えています。

● 地域で無料エコー検査を継続

また、地域の公民館などを借りて出張無料エコー検査を3カ月ごとに行うようにしています。1日で実際に検査できるのは20人弱ですが、毎回30人近い希望者があり、定員をこえてしまいます。当日検査できなかった方についても後日、診療所で無料検査をするようにしています。

事故当時18歳以上だった若い人たちは県の甲状腺検査の対象とされず、不安を抱えてきました。結婚や出産を機に健康を心配して検査に訪れる方も少なくありません。この活動を通して、地域で様々なとりくみをしている方々ともつながることができました。そのなかには、「ふくしま共同診療所と共にあゆむ会」に参加してくれる方もいます。

女性検査技師による乳腺エコーや、リウマチ治療などの実績が口コミで広がり、患者さんが増えている科目もありますが、曜日によっては来院者が少ないときもあります。「共にあゆむ会」のみなさんのお力も借りながら、ふくしま共同診療所を「命のよりどころ」として広げていきたいと思います。